# 田宮虎彦「銀心中」論

## ――断ち切られる男女――

徳永光展

### 一　緒言

「銀心中」は、一九五二（昭和二七）年二月に「小説公園」に発表され、一九五六（昭和三一）年に単行本として出版されている。東京で理髪店を営んでいた喜一、佐喜枝夫婦のもとにやってきた甥の珠太郎に佐喜枝は咄嗟に恋愛感情を抱くが、喜一が招集を受けて出陣してしまうことにより、珠太郎も佐喜枝に応えていく。けれども、珠太郎にも召集令状が届き、佐喜枝は珠太郎とも引き裂かれなければならなくなるのであった。その後、先に戻ってきたのは珠太郎であったが、彼は佐喜枝に会いたい一心だった。そうして、二人は力を合わせて理髪業を営む。その後、喜一が復員するに至り、珠太郎は佐喜枝から離れていくが、そのことに佐喜枝は耐えられず、珠太郎を追ってしろがね温泉までやってきてしまうのである。物語の時間は、喜一も珠太郎も召集を受け、共に戻って来ることから、戦中（一九四一年一二月八日～一九四五年八月一五日）を挟んでいることが確実である。

戦前に結ばれた喜一と佐喜枝は理髪店を営み、相応の生活をしていたが、戦争が両者を切り裂き、その間隙を縫って生じた珠太郎と佐喜枝との一時の生活もまた戦争によって終焉を迎えるのである。

しろがね温泉で、珠太郎をひたすら恋願う佐喜枝に同情したのが旅館を切り盛りしていた源作だった。三度の食事を毎日運び、身の上話に付き合ううちに、喜一には同情が生じて来る。東京へ帰れと諭しても、応じようとしない佐喜枝は結局「霧生川に身を投げた」（一二二頁）が、その死体が発見された時、「源作は、その佐喜枝の屍体におおいかぶさるようになって死んでいた」（一二三頁）のである。

なお、作品のタイトルである「銀心中」とは、しろがね温泉における佐喜枝と源作の死を指して名づけられたものであると言える。

### 二　先行研究

本作品に関する独立した先行論は見出せない状況にあるが、わずかに石塚友二が以下のように述べていることを紹介しておきたい。

『銀心中』は、これを筋立からのみ眺めるならば、多少風変りとはいっても、要するに一篇の情痴譚にしか過ぎまい。道徳的

には不倫な愛欲物語でもあるであろう。良人の甥の肉体に牽かれて家出した妻、その一面の事実は動かせないからである。しかし、『銀心中』の主人公から瀆れた淫乱女を読み取った読者は誰もいないであろう。逆に、力を尽して根限り真実に生き抜くべく努めつつも、ついに及ばず敗れ去って行く佐喜枝に、満腔の同情を惜しまないのである。行為の結果は不貞に相違ないにしても、精神的にはあくまでも純粋で、瀆れを知らない可憐な女性を感取するからである。一つは、良人の喜一が神の如き善意の持主であり、佐喜枝の恋の相手であるその甥の珠太郎が、人間的にはあくまでも純潔だったが為に、珠太郎を求める佐喜枝の行動に不倫の翳を覚えないとも言い得るであろうが、また、二人の男のそのような善良さの故にこそ悲劇は避け得なかったのである。しかし、ここで見逃してならぬ重要な一点は、美しい魂の所有者である三人の触れ合いから生じた悲劇も、畢竟は、戦争という、個人的には如何とも為し難い国家悪に依って演出されたということである。召集された喜一に戦死の誤報がなかったならば、珠太郎と佐喜枝を決定的に結ぶ運命の戯れもなかったであろうからである。（石塚友二「解説」、田宮虎彦『銀心中』新潮文庫　一九六一年二月　二四〇～二四一頁）

それでは、本稿では、このような捉え方も視野に入れながら、作品を具体的に追っていこうとするものである。

## 三　構成

一行空きの部分を作品中に四箇所見出せることから、「銀心中」は全体で五つの場面で構成されていると判断できる。

第一場面（九三～九六頁）は、戦後、佐喜枝がしろがね温泉を訪れ、ここで珠太郎に出会った日を回想しつつ、源作の世話になりながら放心状態で過ごす雪の日の出来事を記した部分である。

一方、第二場面（九六～九九頁）では、時間が過去に遡行する。喜一と佐喜枝が世帯を持って理髪業で生計を立てていたこと、「珠太郎は佐喜枝の夫の喜一の姉の長男で」（九六頁）「喜一と珠太郎とは叔父甥というわけであったが、年は八つしか違わなかった」（九六頁）こと、珠太郎と「佐喜枝とでは二つしか違わない」（九六頁）という設定が示される。同時に、珠太郎と佐喜枝が出会った経緯も語られている。喜一の姉も理髪業を営んでおり、姉の長男で当時一六歳だった珠太郎が店を手伝っていたところを新婚の喜一（二四歳）、佐喜枝（一八歳）が訪れたという設定となっている。この時、珠太郎も佐喜枝も共に顔があからむのであり、両者が親戚というよりは異性として既に意識し合っていた事実が分かる仕組みになっている。その翌々年には「喜一について修行をつむため」（九八頁）「東京の佐喜枝の家に珠太郎が住みこむようになった」（九八頁）という。時に珠太郎は一八歳で、佐喜枝には彼が「中高い面差しの、色じろな、品のある青年」（九八頁）に映ったのである。

第三場面（九九～一〇四頁）は、喜一宅での珠太郎の生活ぶりに始まるが、約束の一年がやってきた時に「喜一は召集をうけ」（九九頁）珠太郎に店を託す。しかしながら、「喜一からニューギニア

の島の名をかいた最後の手紙がとどいた頃に、珠太郎も戦争につれてゆかれた」（一〇〇頁）のである。「喜一を見送った夜よりも、佐喜枝には珠太郎を見送った夜のことが忘れられない」（一〇一頁）のであったが、喜一戦死の内報を受け（一〇一頁）、敗戦に接してみると、「ふた月ばかり虚脱したような」（一〇三頁）毎日を過ごさざるを得なかった。そんなある日、珠太郎が復員し、佐喜枝のもとに戻って来る。「二人は夫婦になる約束をし」（一〇三頁）、理髪店を立ち上げ、「家を建てる時あちらこちらから借りた借金をかえしてしまった時に、喜一が帰って来た」（一〇四頁）のである。

第四場面（一〇四～一一九頁）は、しろがね温泉に「珠太郎を追って来た」（一〇五頁）佐喜枝の視点から、喜一復員後、珠太郎と別れが生じるまでの顛末が回想されている。温泉宿を切り盛りする源作の歌に癒されながら、佐喜枝によみがえるのが「珠太郎は喜一が帰って来ると、二三日してほとんど自分の力だけで建てたような新しい家を出ていった」（一〇八頁）顛末であった。「伊藤の理髪店」（一〇八頁）、佐喜枝の「兄夫婦のいる東海道の宿場町」（一一〇頁）、東北の「しろがね温泉」（一一三頁）という風に、点々と佐喜枝から逃げるように放浪する珠太郎を追っていくと、「しろがね屋という酌婦屋の梅子という女と珠太郎が馴染んでいるという噂」（一一三頁）を聞く。源作は珠太郎が姿をくらませる理由を「東京にいるお客さんの旦那への義理だてだ」（一一九頁）と告げると、佐喜枝は源作に一緒に死んでくれと「半分はふざけてでもいるように、半分は眞面目でもあるように」（一一九頁）「無理に明るい笑い聲」（一一九頁）で言うのであった。

第五場面（一一九～一二三頁）では、しろがね温泉に引きこもる佐喜枝が「吹雪がやんだ」（一一九頁）日に「珠太郎に會った」（一二〇頁）が、「東京へ歸れ」（一二〇頁）と言われて別れたのち、霧生川へ「崖の上からとびこむ時に、もう手首の血管を商賣用の剃刀で切っていた」（一二二頁）のであった結末が示されている。さらに、「源作は、その佐喜枝の屍体におおいかぶさるようになって死んでいた」（一二三頁）のである。

## 四　確認できる前提

佐喜枝は、「激浪のようにのたうちまわっている吹雪の灰ずみいろのうねり」（九三頁）が感じられる激冬の季節にしろがね温泉に逗留し、珠太郎に再び会える日をこいねがっているところから、物語は紡ぎ始められる。湯殿が「ここ十日ばかり」（九四頁）「いつもひっそりと眠ったように静かであった」（九四頁）とあることにより、佐喜枝がそれだけの日数をこの土地で、ひたすらに珠太郎の帰りを待って過ごしている事実が確認できる。「この夏、佐喜枝が珠太郎を追ってはじめてこのしろがね温泉に來た」（九四頁）という事実からは、同じ年の冬の風景描写で作品が幕を開けていることも分かるのである。

夏に珠太郎と共にこの混浴温泉に浸かった時の出来事を回想すれば、「珠太郎への思慕はいっそう心の切なさをかきたてた」（九六頁）のであり、「佐喜枝は自分自身では氣づかない心のどこかで、珠太郎のまぼろしの聲を追いもとめていた」（九六頁）という記述をも併せてみれば、作品冒頭で読者は佐喜枝が珠太郎への愛情に取り憑かれていた様子を既に感じ取ることができるのである。翻ってみれ

ば、珠太郎への執着に依存しなければ生きていくこともできかねる精神状態に佐喜枝が追い込まれていた様子をも読み取ってよいであろう。「佐喜枝が一人で人氣のない湯につかる日がつづいてから」（九五頁）しろがね温泉が「天保十二年九月」（九六頁）を起点に「約五百年前」（九五頁）に「溫泉の湧き出づること」（九五頁）を知るに及んで、「藥泉靈湯」（九五頁）に縋っている自らの姿を凝視する。

では、佐喜枝が執着する珠太郎とは何者か、またなぜ彼と佐喜枝との恋愛が成就しないのかという問いが生まれる。また、さりげなく冒頭で吹雪の到来を知らせる「湯宿の下男の源作」（九三頁）の存在も確認されるが、物語の進行に伴って重要な役割を果たすようになるこの人物が当初は遠景に配置されていることに、興味をそそられもするのである。佐喜枝が、次に珠太郎がクローズアップされている中で、物語の幕開けを告げるかのような役割を源作は冒頭で果たしている。その後、次第に佐喜枝の世界に入り込んでいく源作は物語の当初にはその「澁い聲が冷たく消えてしまう」（九三頁）ことで目立たない位置に留まるが、作品を読み進めば、次第に重要な立場を担うようになり、ひいては佐喜枝の運命に深く関与することも明らかとなってくるのである。

## 五　回想される結婚

佐喜枝が結婚して初めて東北を旅し珠太郎に出会った時、彼はまだ一六歳であったが、夫の喜一と同じく長身だったことが佐喜枝には強く焼き付いたのだった。喜一の「身よりの男たちはみな五尺七八寸はあるような長身な男たちばかりであることに氣づいた」（九七頁）時、既に佐喜枝の関心は喜一の身内にあたる男性たちにまで拡がっていっていたと見るべきである。「五尺八寸」（九九頁）あるという珠太郎に佐喜枝が興味を持ったとしても決して不思議ではない。その上、珠太郎には喜一には感じられない「あどけなさ」（九七頁）が初対面時には観察されたし、東京で佐喜枝宅に住み込むようになってからだと、「訛りがぎこちなく言葉にかげおち」（九九頁）「妙に稚く、そして甘えかかる聲」（九九頁）に魅せられたが、その原因は「聲のうるんだうつくしさ」（九九頁）に起因していたとあっては、佐喜枝が二歳年下になる珠太郎に母性本能をかきたてられていたと分析し得るのである。「喜一について修行をつむため」（九八頁）に佐喜枝宅に来た珠太郎に対して、様々に面倒を見れば見るほど、佐喜枝が珠太郎に思いを深くしていったのも確実であろう。

## 六　戦中という時間

珠太郎が「喜一から東京風な仕上げを敎えこまれ」（九九頁）るべく、「最初は一年という約束で」（九九頁）喜一のもとに奉公していた頃とは、「戰爭で雇い職人が目立って少くなった」（九九頁）時期に遭遇していた。つまり、太平洋戦争の最中に当たる訳だが、一年が経つ頃には、「喜一は召集をうけた」（九九頁）のであった。珠太郎に店を託して喜一は戦場に赴くが、「喜一からニューギニアの島の名をかいた最後の手紙がとどいた頃に、珠太郎も戰爭につれてゆかれた」（一〇〇頁）のであった。

佐喜枝は「珠太郎を見送った夜」（一〇一頁）に「珠太郎へいだいている自分の愛情に氣づいた」（一〇一頁）のである。けれども

喜一の戦死を知らされ、「町内で一軒だけ残っていた同業の店に手傳いに出かけてゆくようになっていた」（一〇一～一〇二頁）最中に敗戦の知らせを受け、生きる方途も分からなくなり、「ふた月ばかり虚脱したようなそうした毎日」（一〇三頁）に身を委ねなければならなくなったのである。戦中という時間は、佐喜枝から喜一と珠太郎という愛する人々を剥奪していた。その結果、佐喜枝は精神的空虚感に苛まれる結果へと導かれてしまっていたのである。

そうしたある日、佐喜枝の所に珠太郎が帰ってきた（一〇三頁）。二人して「東京の町々の理髪店に住みこみの職人として働きはじめ」（一〇三頁）、「いつからということなしに、二人は夫婦になる約束をした」（一〇三頁）ばかりか、「もとの焼けあとに」（一〇四頁）店を持つと決心し、その思いを実現したちょうどその時に皮肉にも「喜一が帰って來た」（一〇四頁）のである。

戦中という時間は佐喜枝から喜一と珠太郎を奪い取ってしまっていた。その上で、生きる目標を見失ってしまっていた佐喜枝にとっては背の高い頼りがいのある男性に再び巡り合うことが不可欠なのであった。

復員の順序が逆であり、喜一が先、珠太郎が後であったなら、佐喜枝は夫婦関係にあった喜一を愛して従来通りの夫婦関係を取り戻すことができたと推察される。しかしながら、物語はそのような破綻のない成り行きには落ち着かず、珠太郎を喜一に先んじて佐喜枝の前に送り込む。佐喜枝は珠太郎への愛情を再認識するが、喜一の帰還により、許されぬ三角関係の渦中へと放り込まれるのである。

このような筋書きが佐喜枝の視点に基づいて描かれている事実は、しろがね温泉で「佐喜枝は、思い出から我にかえった」（一〇四頁）という場面の転換を示す一文の存在によって、はっきりと確認できるのである。

## 七　葛藤

しろがね温泉で珠太郎を待つ場面に話が戻って来ると、宿を預かる源作以外には取り立てて話し相手もなく、「佐喜枝は、もう二十日ばかり、この山の湯にこもっている」（一〇五頁）のであった。

珠太郎は喜一の復員後「二三日して」（一〇八頁）佐喜枝から去っていった。その後、「半年近くたって伊東の理髪店に住みこんでいるとわかって」（一〇八頁）会いに行った佐喜枝に対して、珠太郎は喜一への義理立てを重視するあまり、「すぐに東京に歸ってくれ」（一〇八頁）という言葉に終始せざるを得なかった。その後、「伊東から姿をけした珠太郎を、佐喜枝は自分の兄夫婦のいる東海道の宿場町でみつけ出し」（一一〇頁）、「みかんの買い出しの口實で、冬の間、珠太郎との逢曳きがつづいた」（一一〇頁）のである。一方、「喜一は、自分が何もいわないで、そのうちに二人の仲のきれることを希んで」（一〇九頁）、嫂から便りのあった宿屋へ佐喜枝を迎えに行き、「佐喜枝、歸ろう」（一一〇頁）と言って、「喜びも悲しみもこおりついてしまったような表情のない顔」（一一一頁）を見せはするものの、それ以上彼女を責め立てることは控えるのであった。

思うに、喜一は佐喜枝が戦争の犠牲者であり、また自らも、そして珠太郎も同様である事実を悟っていたのではなかろうか。その上で、妻の佐喜枝、甥の珠太郎を共に許すという姿勢を打ち出し、両

者に対していたとみられるのである。

その後、東京で喜一との生活に戻った佐喜枝に珠太郎の新たな居場所を教えたのは「戰争前から時々思い出したように來てくれる古顔の客」（一一二頁）であった。東北・鷹巻の山奥にある「しろがね温泉」（一一二頁）で珠太郎に出会ったと聞かされるや、佐喜枝と珠太郎の間に手紙と葉書のやり取りが起った。珠太郎からは「簡單に私のことは思いきってくれと書いた葉書」（一一三頁）が佐喜枝に寄こされたが、佐喜枝は居ても立ってもいられずに電報を打ち、鷹巻の駅で二人は再会を果たす。

しろがね温泉で佐喜枝は、珠太郎に梅子という新しい女が出来ていたことを知るが、「自分のことを忘れてくれ」（一一四頁）という一方で「その珠太郎の言葉とうらはらな夜がつづいて、朝、佐喜枝が眼ざめると、珠太郎の眠っている眼に涙がうかんでいた」（一一四頁）のであった。

別れを覚悟して温泉を去ったのは夏の出来事であったが、「歳の暮がせまってから」（一一五頁）「自分の宿業のように」（一一五頁）思いつつ、佐喜枝は再びしろがね温泉を訪れる。そこでは珠太郎には再会できなかったが、彼が馴染んだという梅子なる女性とは出会うこととなった。「自分の荒れすさんだ行末をそのままみてしまった氣持」（一一八頁）、「珠太郎の哀れさ」（一一八頁）、「切なさ」（一一八頁）でたまらなくなった佐喜枝は、しろがね温泉で唯一話のできる源作に気晴らしの「さんさ踊りの唄」（一一八頁）を歌ってくれと詰め寄るが、「珠太郎はお客さんのいる間は、ここさ歸って來ねえ、東京にいるお客さんの旦那への義理だてだつうことだ」（一一九頁）との言葉に「私、このまま東京へ歸るくらいなら死んでしまう」（一一九頁）、「私が死ぬ時、一緒に死んでくれない」（一一九頁）と「源作をじっとみつめながら」（一一九頁）言うのである。

## 八　心中

「吹雪がやんだ」（一一九頁）日、佐喜枝が姿を消したことが温泉中に知れ渡った。「珠太郎と佐喜枝とは、西檜岐温泉の帳場の前で、ふたことみこと言葉をかわしたにすぎなかった」（一二〇頁）が、温泉の主人は珠太郎が佐喜枝に「「東京へ歸れ」と叫ぶようにいった最後の言葉」（一二〇頁）を言って、橇に乗って去っていった事実を報告する（一二〇頁）。「しろがね温泉と西檜岐温泉から人が出た」（一二一頁）上で、捜索の結果、「山毛欅林から七八町下った懸道の曲り角」（一二一頁）で「佐喜枝のはいていたサンペ」（一二二頁）が発見され、「駐在としろがね温泉の若い支配人の二人が川原におりていった」（一二二頁）ところ、佐喜枝に源作が「おおいかぶさるようになって死んでいた」（一二三頁）のである。

佐喜枝が自殺を遂げたのは明らかだったが、源作の死因ははっきりしない。「あと追い心中だという説の方が強くあとに殘った」（一二三頁）ものの、そんな噂が立ちだした後で、「しろがね屋のお女將が」（一二三頁）「源が、女子が可哀そうだ、女子が可哀そうだって泣きながら家の前を通っていった」（一二三頁）と言い出したので、「誰も信じようとはしなかった」（一二三頁）のである。

## 九　戦争という背景

戦後の疲弊した東京から遠く離れ、空襲とは無縁であった東北のしろがね温泉は珠太郎と佐喜枝が苦労して理髪業を営んでいた東京とは全く異なる世界であった。そこに珠太郎は逃げ込むように潜み、梅子という新しい女に近づくことによって、佐喜枝との過去を断ち切ろうとする。

一方、佐喜枝は初対面の時から珠太郎への淡い恋心に動かされていたが、喜一出征後、珠太郎と二人で理髪業を営む生活をしたことで、珠太郎に対して離れられない執着に固執するようになった。そこには戦争による生活の逼迫や先行きの不安があり、頼もしい男性に縋らなくては生きていけない佐喜枝の追い詰められた心理状態を想像することができるのである。

珠太郎も戦局の悪化に伴い、戦地に赴くこととなるが、二人の男性を見送った佐喜枝には珠太郎へのこだわりの方がはるかに強烈に残った。先に出会ったのが喜一であったから、たまたま彼と結婚したようなものの、その後に出会った珠太郎は、喜一の縁戚であるが故に、どこかに喜一の面影を宿しつつ、さらに魅力的に佐喜枝には映ったのである。もはや結婚生活を始めてしまった佐喜枝にとっては、後戻りして珠太郎と結ばれるなどということが非現実的である状況への理解もあるが故に、かえって恋の火花が強く燃えたと解釈することもできるのである。

一方、珠太郎にとって佐喜枝は初恋の人ではあったが、彼女は既に喜一の妻の座にあったのだから、もし仮に佐喜枝に対して執着したとすれば、それは背徳の恋に身を投げることを意味していた。修行での上京とは言え、喜一が召集され、不在になってみれば、佐喜枝と結ばれるのは時間の問題でしかなかった。戦後、珠太郎は真っ先に佐喜枝のもとに帰り着き、新しい生活を希求するが、戦死の報告があったはずの喜一生還という皮肉な巡り合わせを迎えたことで、佐喜枝を断ち切る行為へと進まざるを得ない。そのような形で珠太郎が佐喜枝の前から姿を消すのは世話になった喜一に申し訳ないという表向きの理由、梅子との新しい関係の発生、喜一と佐喜枝こそが生活を共にすべきであるという論理に行き着くが、加えて戦争という不条理な状況下で引き裂かれた男女が再び愛を復活させることの困難性をも雄弁に物語っている。

## 十　温泉という場

東北地方の奥深いしろがね温泉という場で佐喜枝は、宿主の源作に三度の食事を出され、唄を唄ってもらい、身の上話を聞いてもらったりもした。そういう意味では、空襲で焼野原になった首都・東京の殺伐とした風景とは対照的にしろがね温泉を捉えることもできよう。この場は佐喜枝が体を張って仕事に専念していた東京とは異なり、恋心に悶え続ける彼女を受容する場として存在しているように考えられる。また、人里離れた場という点でも佐喜枝の生活圏とは異なる非日常的世界が現出する場であった。ここで、佐喜枝は源作を相手に荒んだ精神状態を受容してもらうのである。

一方、東京に喜一が戻ってくるや否や、佐喜枝から逃げるように転々とした後にしろがね温泉に辿り着いた珠太郎にとっては、ひっそりと生きていくためには必然的に選ばれた場であったようにも

見える。「男と女との純粋な愛しあい方からいうならば、喜一よりも自分が佐喜枝を愛していると思ってさえいた」（一〇九頁）珠太郎には、ダム建設のために来ていた東京にある土木会社の出張所や農林省の水利事務所につとめている技師たち（一一三頁）を相手に細々と理髪する生活が佐喜枝を断ち切り、戦争で受けた精神的痛手を回復するためには適当であったのである。

人々が次々に命を奪われる現場に東京で立ち会ってきた佐喜枝、戦地で様々な労苦を味わってきた珠太郎ともども、精神を回復させる可能性のある場として、外界から隔絶されたしろがね温泉が存在していた。けれども、佐喜枝はそこで珠太郎との別れを覚悟する巡り合わせとなり、死を選ばざるを得なくなった訳であるから、秘境の温泉地にも戦争の傷跡は確実に宿っていたのである。

## 十一　結語

本稿では、戦中を挟む時代背景、首都・東京と日常から隔絶したしろがね温泉といった点に着目しつつ、佐喜枝が戦争に愛する人々を奪われた悲劇を作品に読み取ろうとした。また、佐喜枝が喜一と珠太郎という二人の男性に接する中で、喜一の優しさに心を動かされつつも、あってはならない珠太郎への愛欲を断ち切れない様子に着目してもみた。さらには、荒んだ佐喜枝に同情を示す源作、佐喜枝の帰りを見守る喜一、喜一への義理から佐喜枝を断ち切ろうとする珠太郎にも目を向けてみた。これらを総括し、戦争が登場人物たちの精神を混乱に巻き込み、佐喜枝と源作を結局は死に追いやった点に時代がもたらした悲劇を読み取りたい。

**【付記】**

本文の引用は、『田宮虎彦作品集　第四巻』（光文社　一九五六年二月）によったが、ルビは省略した。なお、本文中に記した頁数も同書のものである。

（とくなが・みつひろ）